（別紙 2）

審査の結果の要旨

氏名　廖　娟

本論文「中国と日本における易経学の近代的変容」は、東アジア前近代文明を支えた経学が、学術近代化と共に周縁に追いやられていく過程で、旧来の方法をあるいは変革し、あるいは踏襲しながらその存在意義を保存しようとした多様な試みを、易経を中心に明らかにした。その際、経学の近代的変遷が一国内で完結する現象だったのではなく、歴史的コンテクストこそ相異なれど中国と日本の双方で並行的に生じた共時的プロセスであることが示された。

本論文は、序説、第一部、第二部、結語の四つの部分から構成されている。第一部では清末民初の易経学の発展を論じた。第一章は学術の近代的転型のなかで伝統的経学の保存に努めた曹元弼の「易学三書」を論じ、第二章では、それとは対照的に易研究を経学の軛から解き放つと共に、西洋由来の「新学」を積極的に採り入れながら、「世界の眼光」において再構成しようとした杭辛斎を取り上げた。第三章では、民俗学的関心に伴われながら古代の易占に再び注目した尚秉和による漢代の『焦氏易林』に対する読解を、主に易象説の観点から詳細に検討した。第四章では、顧頡剛ら古史辨派の疑経的立場による易経に対する史料的批判を論じると共に、ほぼ同時代的に疑経的研究を展開していた日本の研究における易経論を整理した。第二部では、江戸期から明治期にかけての日本における易学の展開と変容を跡づけた。朱子学を独自に継承しつつ形成された江戸期の経学と易学を概観した第五章に続いて、第六章では、新井白蛾の易学を論じ、易経に関する理論的研究がプラクティカルな占法の研究に結びついたさまを悉に明らかにした。第七章では、明治期になって易経の世界観を万世一系の国体論へと再解釈した根本通明のユニークな易研究を詳細に分析したほか、呉汝綸の批判にも言及し、易経学の近代化が中国と日本において異なる政治的文脈のなかで分岐を呈していたことを示した。

本論文の特徴は、中国と日本における易経学の近代的変遷を共時的に俯瞰したこと以外に、中国学術史の近代的転型過程を経学の保存と継承の側から書き直そうとしたことにある。総じて本論文は、ポスト経学時代とされる今日生起しつつある経学再興の新しい傾向を見据えて、経学の営みが内部における一貫性を維持しながら、世界史的な文脈のなかで多様に変容していくさまを、多くの文献を渉猟しながら描写した労作であると言える。一方で、審査においては、多様な分析対象の相互を貫く問いに乏しいこと、個々のテクストに対する分析にはなお改善の余地が多く残されていることなどの問題点も指摘された。しかしながら、これらの課題は今後の研究において修正されるべきであるとは言え、本論文の博士論文としての価値を損なうものではない。

以上に鑑みて、本審査委員会は、本論文が博士（文学）学位を授与されるにふさわしい水準を有していることを、全員一致で承認した。